

## 今昔物語集の否定表現

——本朝法華驗記への増補をめくって——

藤 井 俊 博

はじめに

今昔物語集（以下『今昔』と略称する）の文体研究を顧みるとき、前半・後半に偏る語句や、繰り返し用いられ広く全巻に分布しているような語句を取り上げ、それを漢文訓読体・和文体などの類型的文体の面と関連づけて作者の文体が論じられることが多かった。

『今昔』という一作品の文体を取り上げる場合は、個性的文体の側面を一方で意識すべきであるが、従来はそのような類型的文体の面から説明しようとする傾向が強かったため、様々な文体の要素が混交している事実に突き当たり、かえってその文体形成の実態が明確でなくなっていた感がある。それに対して、稿者は、<sup>①</sup>『今昔』の複合動詞や、「事無限シ」「更ニ無シ」などの類出する語句を取り上げ、その文体基調を漢文訓読文的なものと考える立場をとりながら、特

に『今昔』がそのような文体を採る背景として、『今昔』の出典として最も多くの話数が指摘されている『本朝法華驗記』（以下『法華』と略称し、それを出典とする『今昔』の説話を『法華』依拠説話と称する）の影響が大きい点を指摘した。

本稿では、これらの論考を承けて、「事無限シ」や「更ニ無シ」などの特定の否定表現に止まらず、「無シ」「不<sub>レ</sub>ズ」など広く否定表現全般を取り上げ、その使用頻度や、『法華』への増補の方法の面から、『今昔』の個性的文体の形成の一面を明らかにしたいと考える。

なお、本稿では、『今昔』と同文的な類話を持つ『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺物語』本文を『宇治』と略称し、それと関連する『今昔』の説話を『宇治』関連説話と称する）を同時に取り上げ、比較する。『宇治』は『今昔』との類話を持つものであるが、従来

の研究では、両作品は散逸『宇治大納言物語』を共通の母胎とする作品であり、『今昔』とは直接の伝承関係はないと考えられているようである。この点、『法華』のような、『今昔』の直接的な出典とは異なるのであるが、『宇治』が『今昔』と同じく『宇治大納言物語』の面影を伝えるものとするれば、『今昔』と『宇治』との比較によって、『今昔』の側に付加された特徴を間接的に窺うこともできると考える。そこで、日本古典文学大系本『宇治拾遺物語』の説話目録で、『今昔』と同文の度合いが強いとされた六一話を取り上げ、『法華』と同様の調査を行うことにした。

### 一、否定表現の概観

本稿で取り上げる否定表現は、「不<sub>レ</sub>ズ」「無<sub>レ</sub>シ」が大部分を占めるが、その他に「不行<sub>レ</sub>デ」「不行<sub>レ</sub>ジ」のように用いられる否定の接続助詞「で」・「打ち消し推量の助動詞「じ」「まじ」を含めている。また、『無<sub>レ</sub>シ』の例では、「由無<sub>レ</sub>シ」「並無<sub>レ</sub>シ」「疑<sub>レ</sub>ヒ無<sub>レ</sub>シ」「量無<sub>レ</sub>シ」「限無<sub>レ</sub>シ」のような定型的な表現も含めた。ただし、「止事無<sub>レ</sub>シ」(やむじ)となし)「墓無<sub>レ</sub>シ」「四度ヶ無<sub>レ</sub>シ」「破無<sub>レ</sub>シ」(わりなし)は、一語と考えて、除外した。なお、「なし」の表記は「無<sub>レ</sub>」に統一して示した。

ここでまず、これらの否定表現の量を、『法華』『宇治』との比較において確認しておきたい。調査方法としては、『今昔』と『法華』

『宇治』における出典・類話と比較し、否定表現の増補・削除の状況を調べることにした。(表1)は、『今昔』の否定表現で、出典に対する完全な増補部分に現れた数と、出典の肯定表現からの言い換えて現れた数、さらにそれを合計し例数で割って増補率を算出したものである。また(表2)は、(表1)にある増補の方法の比率を示したものである。

(表1) 出典の増補の方法と増補率

	例数	完全増補	肯定の言い換え	増補の比率
【法華】依拠	九〇一	四〇九	五五	五二・五%
【宇治】関連	八四九	二五二	二七	三二・九%

(表2) 増補の比率

	完全増補	肯定の言い換え
【法華】依拠	八八・一%	一一・九%
【宇治】関連	九〇・三%	九・七%

(表3) 【法華】の上位30字

例数	漢字	順位
848	法	1
680	不	2
638	経	3
637	人	4
493	一	5
461	有	6
429	華	7
411	誦	8
402	此	9
398	生	10
354	其	11
334	心	12
316	之	13
314	大	14
312	日	15
301	僧	16
294	是	17
289	見	18
287	我	19
275	所	20
270	以	21
269	仏	22
268	来	23
267	無	24
253	時	25
248	山	26
248	持	26
244	十	28
242	年	29
238	身	30

(表4) 漢文での「不」「無」の使用順位

無		作品
30位以下	30位以下	古事記
30位以下	15位	日本書紀
30位以下	21位	常陸風土記
30位以下	30位以下	出雲風土記
30位以下	30位以下	播磨風土記
30位以下	30位以下	肥前風土記
30位以下	4位	日本靈異記
3位	2位	東大寺諷誦文稿
2位	1位	田氏家集
30位以下	9位	将門記
30位	5位	尾張国解文
30位以下	30位以下	権記
29位	7位	日本往生極楽記
30位以下	30位以下	御堂関白記
24位	2位	本朝法華験記
18位	2位	本朝文粹
30位以下	5位	陸奥話記
30位以下	2位	高山寺本古往來

(表1)によると、『法華』『宇治』のいずれを出典・類話とする場合でも、『今昔』のみに見られる増補の例が、『今昔』の用例のかなりの割合を占め、ことに『法華』依拠説話の場合には約半数の四六四例(五一・五%)が増補されていることがわかる。また、増補の方法としては、(表2)のように、『法華』『宇治』のいずれの依拠説話においても、『今昔』の否定表現の増補によるものが、肯定表現の言い換えによるものの数を大きく上回っている。このように、『今昔』では、出典・類話に対して、積極的に否定表現を付加しており、否定表現の増補される比率がかなり高くなっていることが窺

える。

しかし、ここで注意したいのは、『法華』依拠説話において否定表現の増補が多いからと言って、もともと『法華』は否定表現が少ない作品ではないことである。それどころか、本書は本邦の漢文の中でも特に否定表現が多く用いられている点で特徴的な作品の一つであるとさえ言える。すなわち、(表3)に『法華』の漢字の上位30字を挙げておいたが、1位の「法」について「不」は第2位の、「無」は第24位の使用量があるのである。

「法」を本書のテーマである『法華経』に関わる漢字として例外扱いするならば、文体に関わって最も多く用いられるのは「不」であるとも言える。そこで他の作品の傾向を見るために、(表4)に諸氏の作成された調査結果<sup>③</sup>を抄出したが、否定表現の頻度は、例えば『古事記』よりは漢籍の影響の濃い『日本書紀』<sup>④</sup>に「不」が多く、『風土記』の中では四六駢麗文の影響が指摘されている『常陸風土記』<sup>⑤</sup>に「不」が多いことなど、漢文の修辭法との関連が想像される。このことは、『権記』『御堂関白記』などの修飾の少ない記録文には例が少ないが、『本朝文粹』を始め『日本靈異記』『将門記』『尾張国解文』『陸奥話記』のごとく対句などの漢文的修辭を用いる漢詩漢文にかなり多くの否定表現が見られ、とりわけ、対句的表現を多用するものとして、漢詩の『田氏家集』では「不」「無」が1位2

位を占め、また諷誦文の『東大寺諷誦文稿』でも2位3位を占めていることによっても窺えよう。

では、なぜそれら修辭的な文体に多くの否定表現が用いられるのであろうか。それは、小川輝男氏が言われたように、否定表現は「想起的残像性」「婉曲的迂回性」「回避的限定性」などの、肯定表現にない効果を持っているからであろう。例えば、「かれは超人的な力を持っている」と肯定で述べるのに対して「凡人の及ばぬ力を持つている」とする方が、かえって読者に豊かなイメージを喚起させる効果が期待される。原重一氏が「否定は相手の知性に一種の揺さぶりを与えることである。価値関係を替えることである。それと同時に、相手の情意に訴え無限深淵の世界へ目を向けさせ、創造的発想をうながす」としたのは、その効果を的確に指摘している。これに加え、例の多い作品では、次のように否定を繰り返す対句が用いられることも、用例数を倍加させる原因であると思われる。

○金波不結雲端注、玉鏡無収雪裏懸（金波結ばず雲端注ぎ、玉鏡収むること無し雲裏懸く）（『田氏家集』182）

○雖世間ナカニ多男而無似父君ニ男雖国内多女而無似母氏ニ女  
〔世の間に男多しと雖も父君に似たる男無し。国の内に女多しと雖も母氏に似たる女無し〕（『東大寺諷誦文稿』）

このように見ると、『法華』の否定表現の多さは、本書が四六駢麗

文の影響を受けているとされることが関連すると推考される。

この点、漢籍仏典の修辭を用いることは『日本靈異記』『日本往生極楽記』などの作品も同じ傾向があるが、否定表現の多さでは、特に本書の著しい特徴を示していると言えるであろう。

このような『法華』に対して、『今昔』編者が否定表現をさらに多く増補したことは、『法華』の文体特徴をよく受け継いだものであると考えられる。稿者は、『今昔』の用語が、『法華』の用語を直訳の形で取り入れるだけでなく、それを自家薬籠中のものとして自由に使いこなしていることを繰り返し指摘してきたが、否定表現全般においても同様の指摘が可能であるように思われるのである。

『法華』の特徴的な表現である「事無限シ」「更ニ無シ」も、大きく捉えれば、このような『法華』の否定表現のパリエーションの一つである。以下の章では、具体的な表現に即して、具体的な使用状況を確認していきたい。

## 二、否定表現の効果

次に、『今昔』の否定表現の増補によって、いかなる表現効果を見せているか、『法華』依拠説話・宇治<sup>④</sup>関連説話との比較によって明らかにしておきたい。

【A】対句による否定の連続

前節では、『今昔』が否定表現を増補する場合が多いことを指摘したが、その結果、次のように否定表現が連続的に使用されるものが生じている（以下、——線部は『法華』『宇治』の否定部分とそれに対応する『今昔』の否定部分、——線部は否定の増補部分）。

○見レバ、泥ニモ不穢ズ、水ニモ不濯ズ、疵モ無テ有レバ、父母喜テ、懐キ取テ、「奇異也」ト思テ、返リ行ヌ。（『今昔』

十二・33）

泥水不穢、一分無疵、父母諸人併乳母等抱取。（『法華』下・

82）

右の例では、「泥水」とあることから、「水ニモ不濯ズ」を、対句的に配している。

○近ク寄テ見レバ、火モ無シ、笠モ無シ、聖人ノ共ニ無クシ

テ獨リ行ク（『今昔』卷十三・5）

○人見走行近見之、無火、無人、聖人獨行（『法華』中・65）

右の例は、直前に「前には火を持たる人有り、後には笠を着たる人有り」とあるのを承け、それを近くで見たという文脈から補足されたものである（念のため、『法華』の彰考館本などを見たが異同はない）。

○……ト誦シテ、暫ク阿闍梨ノ法花経誦スル聞キテ、不見ズ。即

チ、阿闍梨、奇異ク思テ、「何コヘ行ヌルゾ」ト思テ求ルニ、

更ニ無シ。遂ニ誰ト不知ザルニ依テ、「天童ノ下テ我レヲ讚ムル也ケリ」ト知テ、涙ヲ流シテ責ブ事無限シ。（『今昔』十二・37）

○如是讚嘆聽法華経（『法華』下・87）

右の例は、「不見ズ」以降は『法華』の内容にない叙述をまるまる増補した場合である。

このように、増補の事情は異なるが、総じて言えば、否定表現の連続にはあるねらいがあるようである。すなわち、第一例と第二例では各々、「泥ニモ」「水ニモ」「火モ」「笠モ」は表現上は対句のリズムを利用しながら、内容上は事柄を個々に分け具体的に詳述していこうとしていることが指摘できる。また、第三例の長文の補足の場合でも「……無シ」「……不知ザル」は、いずれも「……不見ズ」の内容の言い換えであって、同内容を繰り返し補足して詳述しようとする態度と言える。このように、「対句によるリズム」を利用した技法を多用することにより、「表現内容の補足」を果たしていると考えられる。これが、否定表現の多く増補される理由の一つと考えられるのではなからうか。

そこでまず、右の例のような対句で連用形・終止形同士を連続的に配する用法に注目すると、これは「宇治」の原文などには見出しえないが、次のような『法華』の原文と、その翻訳部分には見出す

ことが出来る。

○法花經ヲ受習テ、日夜ニ誦シ、更ニ他ノ經ヲ不読ズ、亦、真言ヲ不持ズ、顯教ヲ不習ズ、何況ヤ、俗典ヲを不好ズ。(『今昔』十四・12)

○只誦法華不読他經。不習俗典。不持真言。不学顯經。(『法華』31)

また、先出のような『法華』依拠説話の増補部分や『宇治』関連説話の増補部分にも見られることから、これは『法華』などの漢文の用法の影響によって用いられた『今昔』独自の表現特徴であると考えることができる。その増補による用例数は、次の通りである。

(表5) 増補による対句形式

増補部分	『法華』依拠説話	『宇治』関連説話
終止形連続	十二	八
連用形連続	七	十一

次に、『宇治』関連説話の中から、『今昔』の否定表現の増補によって対句的な形式が生じたと思われる例を挙げておく。いずれも、『今昔』の方がリズム感の上で効果的な表現になっていると思われる。

○大衆、各此ヲ聞テ咲ヒ嘲弄シ嗤シル事無限シ。弟子ノ比丘、

此ヲ見聞クニ、恥シク悲ク思フ事無限シ(『今昔』四・6)

○人々笑ふ事かぎりなし。弟子の僧、生きたるにもあらず、死にたるにもあらずおぼえけり(『宇治』174)

○然レドモ、雨降ルトテモ不障ズ、風吹クトテモ不止ズ、雷電

ストテモ不恐レズ、冬ノ寒シ、凍レルニモ、夏ノ熱ク難堪キニモ、一日ヲ不闕ズ、必ず上テ此ノ卒塔婆ヲ礼ミケリ(『今昔』十・36)

○雨ふり、雪ふり、風吹、いかずちなり、しみ氷たるにも、又あつく苦き夏も、一日もかかず、かならずのぼりて、この卒塔婆を見けり(『宇治』30)

○此ヲ思フニ、物忌ニハ、音ヲ高クシテ人ニ不可聞カ、亦外ヨリ来ラム人ニハ努ク不可会(『今昔』二十四・19)

○されば、物忌には、声たかく、余所の人にはあふまじきなり(『宇治』122)

【B】その他の否定表現の効果

次に、内容面から、「表現内容の補足」という効果に関わる点を考察したい。次にこれを、「イメージの明確化」「印象的效果」に分けて、増補の方法を指摘する。

(1) イメージの明確化。

① 否定表現の繰り返しによる場合

これは、否定表現を繰り返し用いることによって、人物・状況・思考などのある面を強調し、その性格や場面を浮き彫りにさせるものである。増補の多くはこの意図があるう。

○日夜寤寐ニ法花経ヲ読誦シテ更ニ餘ノ思ヒ無シ。形、俗ト云ヘドモ、所行貴キ僧ニ不異ズ。然レバ、其ノ國ノ人、此レヲ名付テ、翁和尚ト云フ。衣食ノ便無クシテ、人ノ訪ヒヲ期スレバ、常ニ乏キ事無限シ。若シ、食物有ル時ハ、即チ山寺ニ持行テ、其レヲ便トシテ籠居テ法華経ヲ読誦ス。食物失ヌレバ、マタ里ニ出デテ居タリト云ヘドモ、経ヲ読ム事不怠ズ。

〔今昔〕十三・14)

○身雖在俗。作法似僧。依之時人称翁和尚。其心清淨。遠離諂曲。持法華経。渴仰頂戴。若有食料。隨身往至空閑静処。昼夜読誦妙法花経。若食尽失。又出里辺。随便読経。粮食出来。又入静所。如是受持読誦法華〔法華〕109)

右の例では、傍線部の「餘ノ思ヒ無シ」「不異ズ」などの否定表現が増補されることで、「日夜」に「読誦」し「所行貴キ」という翁の、僧としての資質を強調している。また、「衣食ノ便無クシテ」「乏キ事無限シ」で、その生活ぶりを際立たせつつ、「経ヲ読ム事不怠ズ」を対比的に配して、法華経への信仰を印象づけている。

○暫ク、阿闍梨ノ法花経誦スル聞テ、即チ、阿闍梨、奇異ク思

テ、「何コヘ行ヌルゾト」思テ求ルニ、更ニ無シ。遂ニ誰ト不知ザルニ依テ、「天童ノ下テ我レヲ讚ムル也ケリト」知テ、貴ブ事無限シ。(今昔) 十二・37)

○如是讚嘆聴法華経〔法華〕87)

右は、前の部分に法華経を誦した天童を「何ヨリ来レル人ト不知ズシテ」(この部分「法華」では「天童」とある)としているのを承けた例である。作者の目で始めから「天童」と記している「法華」に対して、「今昔」では阿闍梨の立場からその人を「無シ」「不知ザル」とし最後に「天童」であったと気付くのであり、人物の思考展開に即した描写となっている。

このような否定表現によるイメージの積み重ねは、次のように、「法華」の直訳部分に見られ、これを「今昔」では増補の部分にも活用したものと考えられる。

○若ヨリ法花経ヲ受ケ習テ、昼ル六部、夜ル六部、日夜二二二部ヲ誦スル事ヲ不闕ズ。出家ノ後、住所ヲ不定シテ、一所ニ二宿スル事無シ。況ヤ、菴ヲ造ル事無シ。此レニ依テ一宿聖人トハ云フ也ケリ(今昔) 十三・24)

○日誦六部。夜誦六部。日夜十二部。更無退欠。出家入道。発心以来不定住処。猶於一所不還兩夜。況結庵住哉〔法華〕

②肯定表現と否定表現との対比による場合

①は否定表現を受けて同じ内容を否定表現で繰り返すものであったが、これは、出典にある肯定表現と同じ内容を、否定表現で繰り返すことよつて、内容を補足して明確にしたり、強調したりするものである。(……線部が対比される肯定表現)

○一人ノ気高キ俗有リ。其ノ形只人ト不見ズ。人ノ体ヲ見ルニ、梵天・帝釈ニ似タリ。(『今昔』十三・7)

○有一丈夫。形似帝釈(『法華』23)

右の例では、あらかじめ否定表現によって意味を限定し、肯定表現の「帝釈に似たり」を導く役割を果たしている。

○音、我が妻ニテ有レバ、「彼ハ我が妻ニハ非デ、異人クノ臥タリケルニコソ有ケル」ト思テ……(『今昔』二十六・4)

○こゑの、わが妻にてありければ、こと人々のふしたるにこそと思て……(『宇治』29)

右の例は、声を上げたのが妻であったことから、間男の相手は妻でなく「異人々」であったのだと気づく場面である。相手を我が妻と予測していた夫の立場からの補足である。

○「此ノ浅キ道ハタ否不被知。我ノニコソ知リタレ。……」(『今昔』二十五・9)

○「浅道をば、わればかりこそ知りたれ。(『宇治』128)

右の例では、「我ノミ」とする限定を、否定表現によつて強調しているのである。

以上のように、「今昔」の否定表現が、出典にある肯定表現と同内容の増補であると思われる例は、『宇治』関連説話で約五例、『法華』依拠説話で約一八例がある。

また、次の例は、逆に否定表現に対して肯定表現「忘ヌ」を補足した例である。

○此ノ地藏菩薩ヲ造奉テマツル事ヲモ、不知ズシテ忘ヌ。(『今昔』十七・25)

○佛の事をも佛師をもしらで、……(『宇治』45)

以上のような否定表現の増補は、出典の内容だけでは述べ足りない部分に対して、文脈に即した十全の表現を志向した結果であり、『今昔』の方法をよく表していると考ええる。

(2) 印象的效果

以上述べた否定表現に対して、「事無限シ」「事疑ヒ無シ」などの慣用句的な否定表現は『今昔』の特徴的な表現として特に注意を要する。『法華』依拠説話でこれらは大半が増補されたもので、「疑ヒ無シ」では全一九例中一七例が、「事無限シ」では全八八例中八五例が増補の用例である。また、『宇治』関連説話でも、「ことかぎりなし」は全四二例中三十例が増補部分に現れていることから考える



と、「事無限シ」は単に説話の常套的表現という域を越えて、『今昔』編者が意図して用いた否定表現の典型的なものとなし得る。

『今昔』の「事無限シ」が、物語展開の重要な発端・契機・見せ場・やま場で用いられる強調表現であることは、すでに小峯和明氏に指摘がある。これに加えて稿者は、次のように、この表現が段落

の最後（別段落の直前）に増補される用例が多いことに注目したい。

○……十餘年ノ間ニ余万部ヲ誦シツ。寺ノ内ノ上中下ノ人此レヲ見テ皆貴ビ讀ル事無限シ。

而ル間、此ノ僧亦何ガ思ヒ返シケム、本国ニ返リ下テ、家ニ有テ世ヲ渡ル事、本ノ如ク也。（『今昔』十三・31）

○暗誦法華。逕十余年。誦二万部。寺中上下皆生隨喜。此僧又下本国。如昔与本妻子相共經營世間。（『法華』62）

○車ヲ搔下シテ、榻ヲ立テ、車ノ簾ヲ卷キ上テ見給ハバ、実ニ木ノ末ニ仏在マス、金色ノ光ヲ放テ、空ヨリ様々ノ花ヲ降ヌ事雨ノ如シ。見ニ、実ニ貴キ事無限シ。

而ルニ、大臣頗ル恠ク思エ給ヒケレバ、仏ニ向テ、目ヲモ不瞬ズシテ、一時許守リ給ヒケレバ、…（『今昔』二十・3）

○……車かけはづして、榻をたてて、梢を、めもた、かず、あからめもせずして、まもりて、一時斗おはするに、……

〔宇治〕32）

右の用法の例を、日本古典文学大系本の段落分けに基づきながら、後段落の接続語句の前に来る例を数えたと、(表6) のようになる。なお、段落を繋ぐ語句が無くても大系本が別段落にした例は別に数え、括弧内には、その中の増補による用例数を示しておいた。

(表6) 「事無限シ」の接続語句の有無による分類

		『法華』依拠説話	『宇治』関連説話
接続語句の直前	二九例(二三例)	九例(七例)	
接続語句無し	十五例(十四例)	四例(四例)	
合計	四四例(三七例)	十三例(十一例)	

これを、段落末の用例の中で増補の例の占める比率という面から見ると、『法華』依拠説話で四四例中の三七例(八四%)、『宇治』関連説話で一三例注十一例(八四%)が増補によって用いられており、段落末の用法は大半が増補によって生み出されていることがわかる。また、「事無限シ」の全増補例に対して、括弧内で示したこの用法の増補例が占める割合を見ると、『法華』依拠説話で四三%(八五例中三七例)、『宇治』関連説話で三六%(三十例中十一例)を占めていることから、増補においては段落末の用法が付加される事が多かったことがわかる。

稿者はかつて「事無限シ」が漢文訓読語として用いられ、『白氏

文集』などの影響で本邦の和文体や漢文体の作品にも用いられるに至った経緯を指摘したことがある。すなわちこれは、用言を「事」で締めくくり、さらにそれを主語としつつ「無限シ」と述語を終止形で結ぶ語法であり、本来、和文になかった大きく「切れる」文脈をつくる効果がある。この表現は、漢文訓読調の強調的な語法であり、軍記や説話における力強い抑揚のリズムを生み出すには好適のものであった。『今昔』編者は、段落末尾に「事無限シ」を増補して締めくくり、段落の末尾をより印象的に結ぶことを意図したのではないか。また、『今昔』編者は、そのような効果を持つ「事無限シ」で段落を終わるとともに、右の例のように、次段落に「而ル間」などの接続語句をも多く増補しているのである。これによって、場面の盛り上がりや頂点が段落の切れ目に置かれることになり、段落ごとの印象もより明確になるわけである。ここに編者の文章構成上の創造面を見ることができよう。

### おわりに

本稿では、『今昔』の否定表現を取り上げ、出典や関連説話の表現と比較して多量の否定表現が増補されている事実を指摘するとともに、「対句的なリズム」「内容の補足」「印象的效果」などを造る方法として独自に用いられていることを指摘した。また、このよう

な編者の方法が『法華』などの特徴を受け継ぐものであることは本論でも指摘し得たかと思うが、「事無限シ」の用法など、出典と関わらず『今昔』編者の個性によって用いられている面が多いこともわかった。すなわち、『今昔』編者の文体意識は、『法華』を背景に考えることによって明らかになる面も多いが、それを自在に用いるところに『今昔』編者による独創面も現れてくると考えるのである。今後は、『法華』以外でも影響が考えられる文献を探していくとともに、編者の独創性を明らかにしていくことを課題としたい。

### 注

① 拙稿「今昔物語集の翻訳語について」（『国語学』11）平成二年十二月 和泉書院、拙稿「今昔物語集の文体と法華験記——『更ニ無シ』をめぐる——」（『国語学』103集 平成五年六月）などがある。また、青木毅「今昔物語集」における動詞句「老ニ臨ム」の性格について——『法華験記』との関わりを中心に——（『鎌倉時代語研究』第十六輯 平成五年五月）なども、この点を確認されている。

なお本稿で取り上げる『今昔物語集』の『法華験記』依拠説話は次のものである。卷十二（28・32・33・36・37・38・39・40）十三（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・39・40・41・42・44）十四（2・3・5・6・7・9・10・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25）十五（11・12・28・29・30・35・40・43・44・45・46）十六（3・4・5・6・

16・25・26・35・36) 十七(39・40・41・42)

② 本稿で取り上げる『今昔物語集』の「宇治拾遺物語」関連說話は次のものである。四(6)五(1・18)九(13・18)十(10・11・15・36)

十四(29・35) 十五(4・22) 十六(7・19) 十七(24・25) 十九(2・12・13・20・31・40) 二十(3・12・13・19・34・39・43・44) 二三(15・16・20・21・22) 二四(18・22・43・55) 二五(7・9)

二六(4・10・13・15・17) 二七(2・26・42) 二八(6・20・21・23・24・30) 三二(11・25・29)

③ 『日本書紀』『田氏家集』『将門記』『陸奥話記』『權記』『高山寺本古往来』については、浅野敏彦『平安時代識字層が用いた漢字——「古典対照漢字表」の作成——』(第三三三回同志社国語学研究会の口頭発表の資料による(平成五年一月))のデータを参考にさせていただいた。

また、『東大寺諷誦文稿』は柴田雅生『東大寺諷誦文稿』(「漢字講座5 古代の漢字とことば」明治書院 昭和六三年四月)による。『本朝文粹』『日本往生極楽記』『本朝法華験記』については、新日本古典文学大系・日本思想大系によって稿者自身がデータを作った。『古事記』は、小林芳規『古事記音訓表(下)』(「文学」 昭和五四年一月)、『日本書紀』は白藤禮幸『日本書紀の字彙について』(「お茶の水女子大学人文科学紀要」昭和五六年三月)、『風土記』は白藤禮幸『風土記漢字頻度調査』(「論集上代文学11」)、『尾張国解文』は「尾張国解文」宝生本における漢字について(「訓点語と訓点資料」76)、『御堂関白記』は、前田富祺『記録の漢字』(漢字講座5 古代の漢字とことば)明治書院 昭和六三年四月)による。

④ 小島憲之『上代日本文学と中国文学』(塙書房 昭和三十七年九月)に、『古事記』は序文以外は漢籍による潤色が少ないのに対して、『日本書紀』には数多の漢籍の潤色があることが指摘されている。

⑤ 小島憲之前掲書には、『常陸風土記』に、六朝文学の四六駢麗体を学んだ文章や、『文選』に典拠のある言葉が用いられていることが指摘されている。

⑥ 小川輝男『否定表現の原理』(「文教国文学」14 昭和五九年二月)

⑦ 原重一『国語に於ける否定の機能』(「中京大学文学部紀要」8-2 昭和四八年一月)

⑧ 小山登久『変体漢文の文体史』(「講座日本語学」7 文体史I 明治書院 昭和五七年八月)は、本書が四六駢麗体の影響を受けているとする。また、峰岸明『変体漢文』(「国語学叢書11 東京堂出版)は本書には漢文調の影響が著しく、四字句を使用する点に、仏典の偈の影響があると推定している。

⑨ 注①の論文を参照。

⑩ 小峯和明『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院 昭和六〇年一月)

⑪ 「宇治」で別段落に続く例は、「接続詞無し」五例、「接続詞有り」4例(さて二、かやうに一、ここに一、かかる程に一)、説話末一例などが見られる。これに対し「今昔」の「法華」依拠説話では、「接続詞無し」四五例、「接続詞有り」(然る間三三、其の後一八、然れば九、然るに六、然れども四、其の時に四、其の夜三、亦三、然て二、但し二)などが見られる。「宇治」では単純な接続であるのに対して、「今昔」の接続詞は、時間経過や論理展開の面で、大きな切れ目が感じられる。

⑫ 拙稿「事限り無し」考』(「京都橘女子大学研究紀要」第17号 平成二年二月)